

## 隋の東部ユーラシア規模での世界戦略

——北方と西方への遠交近攻、以夷制夷の対外政策——

菅 沼 愛 語

### はじめに

隋（五八一～六一八年）は、三十七年間の短命王朝であったうえに、煬帝が三度の高句麗遠征（六一二～六一四年）の失敗によって国力を疲弊させ、国を滅ぼした印象が強く、外征や対外政策が拙劣であるというイメージがあるかも知れないが、文帝の時代（五八一～六〇四年）と、煬帝の時代（六〇四～六一八年）の高句麗遠征開始（六一二年）までの外交政策は秀逸であった。

例えば、隋は建国直後、モンゴル高原から中央アジアに至る広大な領域を支配する強大な突厥帝国を、離間策によって東西に分裂させ（五八三年）<sup>①</sup>、弱体化させたが、これは隋の外交が優れたものであった事を示す一例であろう。これら、突厥、及び東西分裂後の西突厥に対する隋の離間策については、護雅夫氏、松田寿男氏、内藤みどり氏が指摘している<sup>②</sup>。しかし、突厥以外の周辺国家に対する隋の外交については、あまり知られていない。

『隋書』『旧唐書』『資治通鑑』などの史書を紐解くと、隋は、突厥、西突厥だけではなく、その他の周辺諸国（吐谷渾、契丹など）を討伐、

もしくは帰順させるために周辺国（東突厥、鉄勒など）を巧妙に利用し、「以夷制夷（夷を以て夷を制する）」とも言える巧みな対外戦略で臨んでいる。例えば、煬帝は、大業元年（六〇五）、東突厥の啓民可汗に命令し、隋軍と協力して契丹を討伐させ、大業四年（六〇八）、鉄勒に吐谷渾を討伐させている（詳しくは後述）。

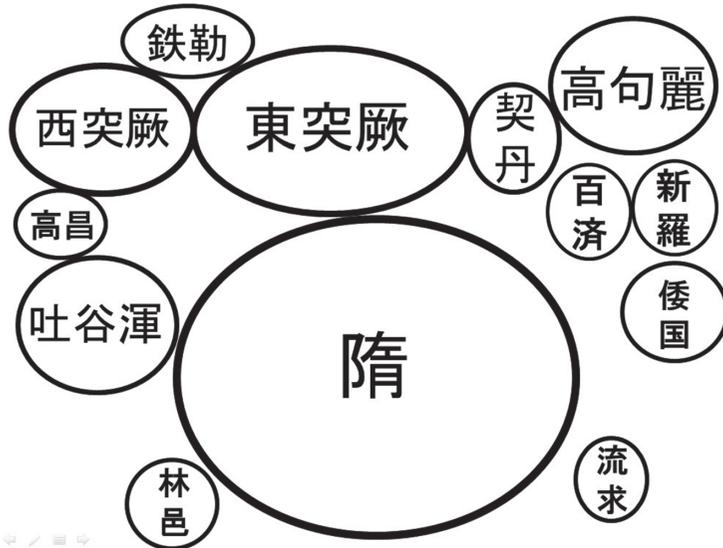
そもそも、文帝が隋を建国した当初（五八一年）は、南には陳が控えており、中華は依然として未統一の状態であった。それに加え、北方と西方には精強な遊牧騎馬民族の大帝国突厥が強盛を誇り、中華を圧迫していた。

隋の先代の北周と北斉は、華北の覇権をかけた戦いに勝つため、突厥の支援を得ようと競って可汗に贈物をおくり、歓心を得るため腐心したが、こうした中華の分裂・対立が突厥を増長させ、その勢力拡大を助長した。そして、突厥は、文帝が隋を建国すると、四十万の兵力で大々的に入寇してきた。このため文帝は、陳を討滅して中華を再統一するよりも先に、突厥に応戦する必要性に迫られた。

隋は、このように背腹に強敵を有する危機的な状況から、軍事力の行使に加え、巧妙な外交も活用し、突厥を東西に分裂させ、中華を統

【年表】 隋の外交・外征と、その段階的変遷

段階	帝	年代	隋の国内事情・国際情勢など	隋の外交・離間策・謀略
第1段階		開皇元 (581)	2月、楊堅が隋を建国。この年、突厥の佗鉢可汗が死去。沙鉢略可汗が即位し、北齊の高宝寧と連繫して隋に入寇	この頃、突厥に対する「遠交近攻」策を実施し、達頭可汗、処羅侯に遣使し懐柔を画策
		開皇2 (582)	沙鉢略可汗が40万騎を率い大規模に入寇	文帝に懐柔された達頭可汗が撤退
		開皇3 (583)	隋の離間策（遠交近攻）により突厥が東西に分裂	阿波可汗が隋と通好したため、沙鉢略可汗は激怒し阿波可汗の領地を襲撃。阿波可汗は達頭可汗のもとに逃亡
第2段階		開皇4 (584)	文帝と沙鉢略可汗が和親	文帝が千金公主を養女となし大義公主に改封。文帝と沙鉢略可汗が舅婚関係を結ぶ
		開皇5 (585)	7月、沙鉢略可汗が文帝に上表し「臣」と称す	
		開皇7 (587)		文帝は即位直後の莫何可汗に鼓吹幡旗を下賜。莫何可汗は旗鼓を持って阿波可汗を攻撃し、阿波可汗を捕縛
第3段階	文帝	開皇9 (589)	隋が陳を攻め滅ぼす【隋による中華の再統一】	
		開皇13 (593)		大義公主が都藍可汗に殺される（実は隋の謀略による）
		開皇16 (596)		吐谷渾に光化公主を降嫁させる
		開皇17 (597)	文帝が染干に安義公主を降嫁させ優遇したため、都藍可汗は怒り、朝貢を停止し、頻繁に入寇	文帝が突厥への離間策として、弱小の染干に安義公主を降嫁させ優遇
		開皇18 (598)	文帝の高句麗征伐	
		開皇19 (599)	4月、染干が入朝（都藍可汗が達頭可汗と連合し染干を攻めたため、染干は敗走し隋に内附）。10月、文帝が染干を啓民可汗に冊立。12月、都藍可汗が部下に弑殺される【突厥に内訌勃発：染干と都藍可汗・達頭可汗が対立】	啓民可汗に義成公主が降嫁（安義公主死去のため）
		仁寿3 (603)	隋の策謀により達頭可汗配下の鉄勒等の諸族が叛き、啓民可汗に降伏。達頭は大敗し吐谷渾に亡命。啓民可汗が余衆を収め東突厥の大可汗となる【東突厥が隋に帰順】	
		仁寿4 (604)	文帝が崩御し、煬帝が即位	
		第4段階	煬帝	大業元 (605)
大業3 (607)	4月～9月、煬帝の北巡。7月～8月、北巡中に煬帝が東突厥の啓民可汗のテントを訪問（煬帝は、可汗のテントにいた高句麗の使者と会う）。この年、倭国から遣隋使（小野妹子）至る			煬帝は高句麗の使者に対し「王が来朝しなければ啓民可汗を率い高句麗に巡行する」と言い、高句麗王の来朝を促す
大業4 (608)	1月、永濟渠の開鑿を開始。7月、宇文述の吐谷渾遠征			鉄勒に吐谷渾を討伐させ、吐谷渾の可汗伏允を東に遁走させる
大業5 (609)	6月、煬帝が張掖に滞在。6月、西海・河源・鄯善・且末等の四郡を設置			啓民可汗が死去し、息子の始畢可汗が即位して義成公主と再婚
大業6 (610)	陳陵が流求に遠征し、2月、煬帝に流求の捕虜を献上。この頃、西突厥で内訌勃発。射置可汗が泥掘処羅可汗を攻撃し、敗北した泥掘処羅可汗は東に逃走			この頃、射置可汗が煬帝に通婚を請願。煬帝が泥掘処羅可汗の殺害を通婚の条件に提示したため、射置可汗は泥掘処羅可汗を撃破
大業7 (611)	12月、西突厥の泥掘処羅可汗が臨朔宮（河北省）で煬帝に拝謁			
大業8 (612)	正月、第1次高句麗遠征。9月、煬帝が東都洛陽に帰還			高昌に華容公主を降嫁させる
第5段階		大業9 (613)	3月、第2次高句麗遠征。6月、楊玄感の乱が勃発	
		大業10 (614)	2月、第3次高句麗遠征	泥掘処羅可汗に信義公主が降嫁
		大業11 (615)	煬帝の北巡。8月、始畢可汗が数十万騎を率いて入寇し、煬帝を雁門（山西省）で包囲	この頃、始畢可汗の弟叱吉設に離間策（公主降嫁と南面可汗への冊立）を仕掛けるが失敗
		大業13 (617)	5月、李淵が太原で挙兵し、11月、恭帝（煬帝の孫）を擁立	
		武徳元 (618)	3月、煬帝が宇文文化及に殺される。5月、李淵が唐を建国【隋の滅亡、唐の建国】	



【図1】 隋を取り巻く国際情勢（中華統一直後）

一し、世界帝国を築いていったのである。なお、中華統一直後の隋を取り巻く世界情勢は【図1】に示したとおりであり、このうち、隋は滅亡までに、東突厥・西突厥・吐谷渾・契丹・鉄勒・高昌・百濟・新羅・林邑・流求などを武力と外交により次々と臣従させ勢力下に組み込んでいっている。

本稿では、このようなグローバルかつダイナミックに展開された隋の外交・外征の様相とその変遷に着目し、考察を加えたい。とりわけ、

北方と西方への「以夷制夷（夷を以て夷を制する）」、「遠交近攻」という隋の外交・外征政策に注目し、突厥も含めた周辺諸国に対する隋の外交政策に着目したいと思う。なお、「外交」と「外

征」は関連が深く、広義には外交に外征も含まれるが、本稿では、外交と外征を一定区別し、外交を主たる研究対象とする。

本稿は五章から成り、第一章で、まず隋の外交・外征の段階的な変遷を示し、次いで、第二章と第三章で突厥（東西突厥）に対する隋の離間策（「遠交近攻」策など）を論じ、第四章で、周辺の諸国家・諸勢力に対する隋の「以夷制夷」の外交政策を取り上げ、隋の外交戦略について論考する。第五章では隋の和蕃公主を取り上げ、通婚を利用した隋の和親策・離間策を整理し、考察を加える。また、本稿では『隋書』『旧唐書』『新唐書』『資治通鑑』から隋の外交戦略に関する事柄を抽出し、年表や図表に提示した。註に引用した史料の「」内は筆者の翻訳であり、傍線は筆者が附した。（なお、突厥は、五八三年以降、東突厥と西突厥に分裂するが、本稿では、東突厥のことを適宜、突厥と記す。）

### 第一章 隋の外交・外征の段階的な変遷

最初に、隋の外交・外征の段階的な変遷をまず見ておきたい。隋は、三十七年間の短命王朝であったが、その外交の様相は時間的に目まぐるしく推移しており、大まかには以下の五つの段階に分けられると筆者は考える。

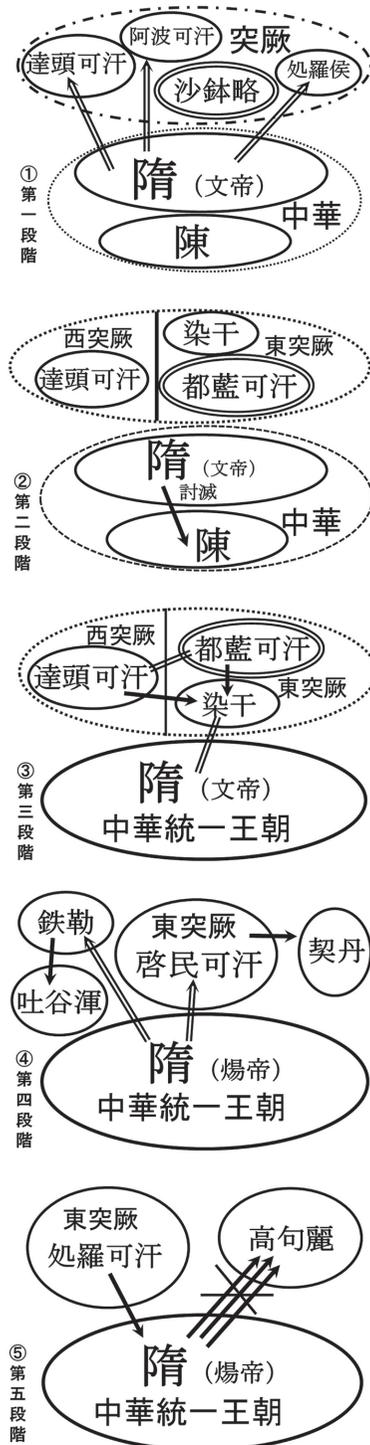
第一段階（五八一年～五八三年）は、隋を建国した直後の文帝の外交である。建国直後、北方と西方に強大な勢力を張る突厥が、隋に対して大規模な入寇を繰り返したため、文帝は、長孫晟の献策する「遠交近攻」<sup>③</sup>という外交戦略も用いて突厥の内訌を煽り、開皇三年（五八三）、突厥を東西に分裂させ、勢力を削いだ。

第二段階（五八三年～五八九年）は、文帝による中華の再統一である。突厥を東西に分裂させ弱体化させた文帝は、次いで陳を滅ぼし（五八九年）、約三百年ぶりに中華統一という偉業を完遂した。

第三段階（五八九年～六〇四年）は、中華再統一後の文帝による世界戦略のための外交である。文帝は、第一段階で突厥を東西に分裂させ弱体化させたが、ここで更に東突厥を本格的に攻略し、帰順させた。また文帝は、公主の降嫁によって吐谷渾と和親し、高句麗へ討伐軍を派遣した。

第四段階（六〇四年～六一二年）は、煬帝の外交である。煬帝は、文帝の外交政策を継承・発展させ、吐谷渾、契丹、鉄勒などを征伐、もしくは帰順させていく。その際、すでに帰順した東突厥の啓民可汗の加勢を得て、契丹を征伐するなど、「以夷制夷（夷を以て夷を制する）」とも言える政策を用いて、効率的に周辺諸国の統御を図っている。

第五段階（六一二年～六一八年）は、よく知られた三度の高句麗遠征の失敗とそれに伴う国内外の権威の失墜から崩壊に至るプロセスであり、この時期の隋は、対高句麗以外にも度重なる外交的な失敗を繰り返している。



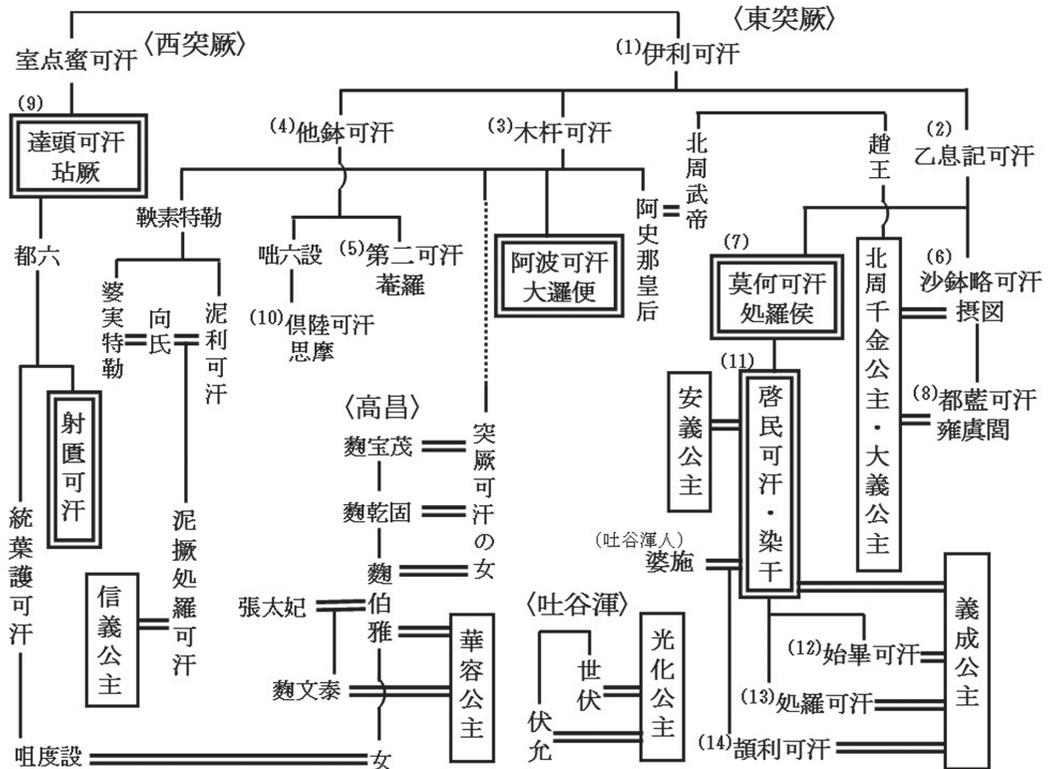
※二重線は同盟、白矢印は隋からの遣使や命令、黒矢印は攻撃

【図2】 隋の外交の段階的変遷

以上、大まかに区分した隋の外交の五つの段階については【図2】に模式的に示したので、そちらも参照されたい。

なお、文帝と煬帝の外交戦略には一定の継承性が見られるが、それは中華統一王朝としての興隆期であったことに加え、煬帝が文帝時代の外交のブレンであった長孫晟と裴矩を引き続き顧問に据え、外交政策を司らせた事にもあると思われる。

隋の外交政策の中心を担った長孫晟は、人材登用という観点からも興味深いので少しだけ言及しておく。長孫晟は、鮮卑族の出身であり弓術に秀でていた。長孫晟は北周時代、突厥の東面可汗摺図（後の六代目大可汗の沙鉢略可汗）に降嫁する千金公主（武帝の弟趙王の娘）に随行し、突厥に赴いたが、その弓矢の才を摺図に愛されて、突厥の王族達と親交を深め、突厥の内情を探る機会を得た。長孫晟は、突厥の



- ※(1)(2)(3)…は突厥（東突厥）可汗の継承順位。
- ※二重四角で囲んだ可汗は、隋からの離間策を受けた人物。
- ※四角で囲んだ女性是和蕃公主。
- ※系図は菅沼愛語「隋代の和蕃公主と北方・西方に対する隋の外交戦略」（『立命館東洋史學』38号、2015年8月）の系図を修正して引用。

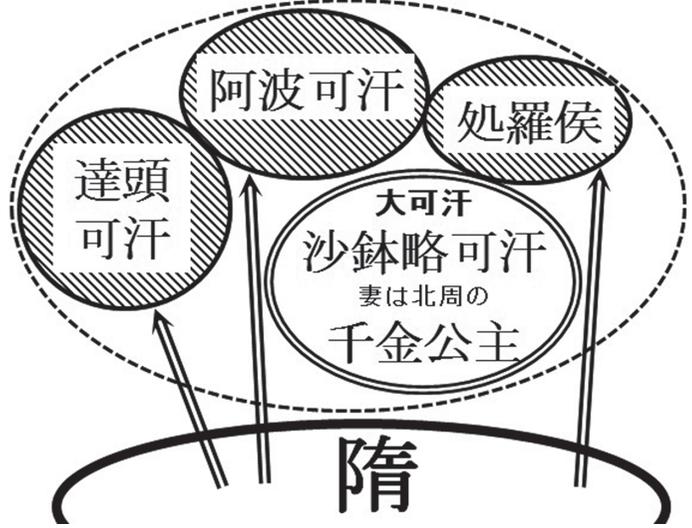
【系図】 突厥、西突厥、吐谷渾、高昌への和蕃公主の降嫁

滞在中に得た情報を活かし、帰国後、文帝に対し突厥攻略のための「遠交近攻」策を建言する（『隋書』卷五一長孫晟伝、『資治通鑑』卷一七五）。  
 このように、北魏以来の北朝の流れを汲む隋は、胡漢混交の色彩も強く、人材登用の面でも自由度が大きく多様であり、また、北方の遊牧騎馬民族の風俗に対する知識や理解から、柔軟な外交を展開する素地があったと思われる。

なお、通常の「外交」は、国家対国家が原則であるが、隋は、突厥という遊牧国家内の諸勢力である諸可汗に対しても「外交交渉」を個別に行っている。これは、言わば「小外交」とでも言うべき広義の外交形態であり、とりわけ遊牧国家の突厥への離間策としては非常に効果があった。（本稿では、国家と国家内勢力との外交交渉を「小外交」と呼ぶことにする。）

そして、隋は、強大な軍事力に加え、巧みな外交戦略も功を奏し、短い期間のうちに、北方の突厥、西方の吐谷渾、東方の契丹など東部ユーラシア規模での世界戦略を推し進め、概ね成功しているのである。

以下の章では、隋の外交政策の様相を、具体的な事例を示しつつ論考し、その特徴を浮き彫りにしていきたいと思う。



※白矢印は隋から使者派遣等の交渉が行われた事を示す。斜線の人物は隋が離間策を仕掛けた相手。

【図3】開皇元（581）～開皇3（583）、突厥に対する文帝の「遠交近攻」策

「はじめに」でも述べたように、隋の建国当初、強大な遊牧帝国の突厥が四十万という大兵力を率い、大挙して襲撃してきたため、突厥への対応が、誕生間もない隋にとって生死をかけた重要課題となった。<sup>6</sup>突厥は、隋の建国と同年の開皇元年（五八一）から開皇三年（五八三）まで、連年、大々的な入寇を繰り返した。文帝は突厥に応戦するため、軍隊を出動させ、辺境地帯の塞を修復し、長城を高く築き上げ

第二章 文帝の突厥への「遠交近攻」策（中華統一前）

て防備を固め、その侵攻に備えた（『隋書』卷八四突厥伝、『資治通鑑』卷一七五）。これに加えて、文帝は突厥への外交政策として、長孫晟の「遠交近攻」策を実行した。尚、この「遠交近攻」策は、通常の国家対国家とは異なり、

【図3】表1

に示すように突厥という遊牧国家内の諸勢力（諸可汗）に対する、いわば「小外

【表1】開皇元（581）～開皇3（583）、突厥に対する隋の「遠交近攻」策

名前	出自・経歴・勢力圏 [突厥伝]	長孫晟の人物評・分析 [長孫晟伝]	隋による懐柔と可汗達の対応 [突厥伝、通鑑175]
達頭可汗・玷厥	室点蜜可汗（伊利可汗の弟）の子。沙鉢略可汗の従父。西面可汗	達頭可汗は沙鉢略可汗よりも兵力が強大だが、地位が低いため、沙鉢略に対して反感を抱く。それゆえ、達頭を扇動すれば、沙鉢略に攻めかかるであろう	開皇元（581）文帝は、達頭可汗に狼頭纛を授け、達頭の使者を沙鉢略可汗の使者より上座に置き優遇。このため達頭は沙鉢略が隋に入寇時、当初は従うものの、沙鉢略が更なる南下を試みると、これに従わず撤退
阿波可汗・大邏使	3代目大可汗木杆可汗の子。佗鉢可汗（4代目大可汗）から次期可汗に指名されたが、生母の身分が低いため大可汗になれず、不満を抱く。北牙（沙鉢略可汗の牙庭の北）が勢力圏	阿波可汗は日和見主義者であるが、沙鉢略可汗を恐れるあまり、その支配を受けているに過ぎない	開皇3（583）阿波可汗は秦州總管の竇榮定に敗北後、長孫晟の忠告を聞き使者を入朝させ隋と通好。沙鉢略可汗も衛王爽に大敗したため、阿波が隋と通好し撤退した事に怒り、阿波の領地を襲撃し母親を殺害。阿波は達頭可汗のもとに亡命し、達頭の軍を率い沙鉢略を攻撃。これが突厥の東西分裂となる
処羅侯	沙鉢略可汗の弟。突利設（あるいは東面可汗）で、突厥の東方にて奚・靺鞨・契丹等を統べる	処羅侯は姦計の多い人物だが、沙鉢略可汗より勢力が弱い。人心を掌握し国人から愛されるが、可汗に疎まれる。可汗の前では取り繕っているが、内心では可汗への疑念と恐怖を抱く	開皇元（581）文帝は長孫晟を処羅侯のもとに派遣し、隋に帰順するよう勧誘

※ [ ] 内は典拠となる史料。史料の略号：長孫晟伝＝『隋書』卷51長孫晟伝、突厥伝＝『隋書』卷84突厥伝、通鑑＝『資治通鑑』※護雅夫「突厥第一帝国における qayan 号の研究」（『古代トルコ民族史研究』I、山川出版社、1967年）も参照した。

交」とでも言うべき策であった。

この策を立案した長孫晟は、前述の通り鮮卑系の人物で、北周の大冢二年（五八〇）、千金公主（趙王の娘）の降嫁に随行し突厥の東面可汗撰図（後の六代目大可汗沙鉢略）のもとに赴き突厥に滞在した。

このため突厥の国情や地理等に通暁し、複数の可汗が分立する突厥の攻略方法を練り上げたのであった（『隋書』卷五一長孫晟伝、『資治通鑑』卷一七五）。

ここで、まず簡単に突厥の国内情勢と継承方法を見ておく。突厥では、モンゴル高原のウチケン山に牙庭を構える大可汗が君主に相当したが、その他にも西面可汗（突厥の西方領・中央アジアを総べる）や東面可汗（突厥の東方領を支配し奚・霫等を総べる）を初めとする複数の小可汗が各地に分立していた。小可汗は所領や兵力を保有し、独自に中華王朝と外交交渉を行う権限も有した。<sup>(7)</sup> また、大可汗の位は概して父子相続ではなく、兄弟で可汗位を継承するか、一族の集会で次期可汗が推戴されたため、可汗位の継承が紛糾する事もあった。可汗の分立状況や不安定な可汗位の継承は、【系図】からも窺えよう。

隋の建国当時、突厥では長老格の沙鉢略可汗（撰図）が六代目の大可汗に推戴されたが、即位の際に混乱があったため、<sup>(8)</sup> 従弟の阿波可汗（三代目の大可汗・木杆可汗の子）が不満を抱いており（『隋書』突厥伝）、内紛の火種となる可能性を有していた。

このような状況下で、長孫晟は、じかに突厥の内情を見聞した経験を生かし、突厥攻略のための「遠交近攻」策を提議した。『隋書』長孫晟伝、『資治通鑑』卷一七五より、その該当箇所を要約すると以下の如くである。

・突厥には、モンゴル高原のウチケン山の牙庭に在る「大可汗の沙鉢略可汗」、中央アジアを支配する西面可汗の「達頭可汗」<sup>(9)</sup>、ウチケン山の北方に在る「阿波可汗」、奚・霫等の東方諸族を総べる「処羅侯」<sup>(11)</sup>（沙鉢略可汗の弟）の四人の可汗があり、各々が強兵を統率し四方に分立している<sup>(12)</sup>（系図参照）。可汗達は互いに猜疑心を抱いているため、突厥を力攻めで征伐する事は困難であるが、可汗達を離間できれば容易に征圧できよう。

・突厥に対して「遠交近攻」策を実施し、強いものを引き離し、弱い者同士を連合させればよい。具体的には、達頭可汗に使者を派遣して通好し、阿波可汗に連合を説く。そうすれば、沙鉢略可汗は自国の右地（西方領土）の防衛に専念せざるを得なくなるであろう。<sup>(13)</sup>

文帝は、突厥への対抗策として長孫晟の「遠交近攻」策を採用すると、開皇元年（五八一）〜開皇三年（五八三）、達頭可汗、処羅侯、染干（処羅侯の子）、阿波可汗に各々遣使し、その懐柔を図った。諸可汗への懐柔策とその成果を『隋書』長孫晟伝、『資治通鑑』卷一七五、太建十三年（五八一）開皇元」条、卷一七五、至徳元年（五八三）開皇三」条から抜粋しまとめると、以下のようなものである。

・開皇元年（五八一）、文帝は達頭可汗のもとに太僕の元暉を派遣し、可汗の象徴である狼頭纛（狼頭の旗印）を授け、達頭可汗の使者が来朝すると沙鉢略可汗の使者よりも上座に置いて優遇した<sup>(14)</sup>（第四章で詳述）。

・開皇元年（五八一）、文帝は処羅侯のもとに長孫晟を派遣し、隋に帰順するよう誘った。<sup>(15)</sup>

・開皇二年（五八二）、長孫晟は染干（鉄勒を統轄<sup>16</sup>）を説得し、沙鉢略可汗に対して偽りの報告をさせ、「鉄勒諸部が反乱を起し、牙帳を襲撃しようとしている」と言わせた。

・開皇三年（五八三）、阿波可汗が高越原（甘肅省）において秦州總管・竇榮定が率いる九總管の歩騎三万と交戦し、しばしば敗北したため、長孫晟は阿波可汗に遣使し、敗北の責任を負わされて沙鉢略可汗から処罰されるであろう事、達頭可汗は既に隋と和睦し沙鉢略も制御できない事、阿波可汗も達頭可汗と連繫すべき事などを進言した（詳しくは後述）。

諸可汗の対立という遊牧国家の弱点を背景に、この「遠交近攻」策は即効性をもって有効に作用し、可汗達の間楔を打ち込み、内紛を助長していった。なお、突厥に対する隋の「遠交近攻」策の詳細（可汗達の出自・経歴、長孫晟の分析、可汗達の対応等）については【表1】のまとめを参照されたい。

この一連の長孫晟の離間策の具体的な経緯を、後の章での考察とも関連するため、少し詳述しておく。

開皇二年（五八二）、沙鉢略可汗が、四人の可汗（達頭可汗、阿波可汗、貪汗可汗、第二可汗）を率い、四十万の大軍を統率して大々的に長城を襲撃し、周槃（甘肅省）で達奚長儒、乙弗泊（甘肅省）で馮昱、幽州（河北省）で李崇を各々撃破するなどの大きな戦果を得たが、戦勝の余勢を駆って更なる南下を試みると、達頭可汗がこれに従わず、撤退した<sup>17</sup>。その後、長孫晟に入れ知恵された染干が、沙鉢略可汗に対し、「鉄勒が叛き、牙帳の襲撃を画策している」と偽りの報告を行ったため、沙鉢略可汗は恐れ、撤兵した<sup>18</sup>。

また、開皇三年（五八三）、沙鉢略可汗と阿波可汗が各々隋に侵攻した。だが、沙鉢略可汗は衛王爽と白道（長城北）で戦い、大敗した。阿波可汗も、高越原（甘肅省）で秦州總管の竇榮定が率いる九總管の歩騎三万と交戦し、しばしば敗北した（『資治通鑑』卷一七五、至徳元年〔五八三〕開皇三〕条）。

そこで、長孫晟は阿波可汗に離間策を仕掛け、阿波可汗に遣使すると、敗北の責務を負わされ沙鉢略から処罰されるであろう事、達頭可汗は隋と和睦し沙鉢略も制御できない事、阿波可汗も達頭と連繫すべき事などを提言した。阿波可汗は長孫晟の進言に従い、使者を入朝させ隋と通好した。沙鉢略は衛王爽に大敗した直後であったため、阿波可汗が二心を抱き隋と通好した事を知って怒り、阿波可汗の領地を襲撃し母親を殺害した。阿波可汗は帰るところを失い、達頭可汗のもとに亡命した。達頭は沙鉢略の暴挙に怒り、阿波可汗に軍を統率させて沙鉢略を攻撃させ、しばしば沙鉢略を打ち破った。これに対し、沙鉢略が、阿波可汗と親しい貪汗可汗も襲撃したため、貪汗可汗も達頭可汗のもとに亡命した。沙鉢略は、従兄の地勤察とも反目したため、地勤察も阿波可汗に帰順した（『隋書』突厥伝、『資治通鑑』卷一七五、至徳元年〔五八三〕開皇三〕条）。

こうして突厥国内が分裂したため沙鉢略可汗は孤立し、開皇四年（五八四）、隋に遣使した。沙鉢略可汗の妻で、北周宗室出身の千金公主も、当初は隋への復讐のため可汗に入寇を唆していたが、ここに至り文帝に請願して養女となり、大義公主に改封された。そこで文帝は、沙鉢略可汗と舅婿関係を結び、和親した<sup>19</sup>。沙鉢略可汗は、開皇五年（五八五）七月、文帝に対し臣を称した（『隋書』卷一高祖紀、突厥伝、

『資治通鑑』卷一七六、年表。

このように、文帝が「遠交近攻」策によって達頭可汗や阿波可汗を懐柔した結果、大可汗（沙鉢略）の求心力が失われ、隋は、突厥の猛撃を凌いだのみならず、沙鉢略可汗を臣従させるに至った。なお、阿波可汗の西走をもって、東西突厥の分裂と解釈されている。

この後、沙鉢略可汗が、西から達頭可汗、東から契丹に各々圧迫され窮すると、文帝は、今度は沙鉢略を後押しした。開皇五年（五八五）、沙鉢略が文帝に対し漠南への移住を懇願すると、文帝はこれを許可し、派兵して援助し衣食も供給した。隋の支援も得た沙鉢略は、征西し阿波可汗を撃破した。このとき隋も阿拔国を撃破し、戦利品を全て沙鉢略に授けた（『隋書』突厥伝、『資治通鑑』卷一七六、至徳三年（五八五＝開皇五）条）。

開皇七年（五八七）、沙鉢略可汗が死去すると、沙鉢略の弟処羅侯と、沙鉢略の息子雍虞閭が、互いに可汗位を譲り合った末、処羅侯が即位した。文帝は、長孫晟に符節を持たせて突厥に派遣し、処羅侯を莫何可汗に冊立し、鼓吹幡旗（太鼓、笛、のぼり、旗）を賜わった。策略に長ける莫何可汗は、開皇七年（五八七）、文帝に授かった旗と鼓を持って阿波可汗を攻撃した。すると阿波可汗の兵士は旗と鼓を見て隋の援軍も到来したと勘違いし、莫何可汗に降伏したため、阿波可汗は捕縛された。その後、莫何可汗は、捕らえた阿波可汗を殺害するか否かの判断を文帝に求め、文帝も阿波可汗を殺さぬよう指示しており、隋の威令が突厥に行き届いていたようである（『隋書』長孫晟伝、突厥伝、『資治通鑑』卷一七六、禎明元年（開皇七＝五八七）条）。

以上のように、文帝は開皇三年（五八三）、「遠交近攻」策を用い突

厥を東西に分裂させたが、沙鉢略可汗の勢力が弱まると、今度は沙鉢略を支援し阿波可汗に対抗させた。莫何可汗も隋の冊立を受け、開皇七年（五八七）、隋の旗を掲げて阿波可汗を攻め、捕縛した。文帝は南に陳が控えていたため、外交により効率よく突厥の内紛を煽り、北の脅威を削いだ後、開皇九年（五八九）、陳を滅ぼし中華統一の大業を果たしたのである（年表参照）。

### 第三章 中華統一後、東突厥及び西突厥への隋の離間策

本章では、中華を統一した後の隋による、東突厥、及び西突厥への離間策に注目する。文帝は、中華を再統一した（五八九年）後、突厥の完全制圧を目指し、開皇十七年（五九七）、弱小勢力の染干（莫何可汗処羅侯の息子で、突利可汗とも称した）を支援して突厥に離間策を仕掛け、大可汗の都藍可汗、西面可汗の達頭可汗を順次排除し、親隋の啓民可汗（染干）を東突厥の大可汗として推戴する。次代の煬帝も、文帝の外交政策を継承し、大業七年（六一一）頃、西突厥の可汗達の対立を煽り、巧妙に攻略を進めていった。文帝と煬帝は、各々離間策を巧みに用いて東突厥と西突厥を脆弱化させ、帰順させていくが、煬帝が三度の高句麗遠征（六一二年～六一四年）に失敗すると、東突厥が隋の軛を逃れ強大化したため、煬帝は大業十一年（六一五）頃、突厥に対して離間策を試みる。

そこで、第一節で文帝による東突厥内の離間策、第二節で煬帝による西突厥内の離間策、そして第三節で、煬帝が三度の高句麗遠征に失敗後に東突厥に対して行った離間策について着目し、『隋書』『資治

(一) 文帝による突厥への離間策(開皇十七年〜仁寿三年)

隋が陳を攻め滅ぼして中華を再統一すると、百済は隋に朝貢して陳平定を祝賀し(『隋書』卷八十一百済伝)、高句麗の王高湯(平原王)は隋を恐れて防御体制を整え(『隋書』卷八十一高麗伝)、吐谷渾の可汗・呂夸も隋を恐れ、陰要の地に逃亡した(『隋書』卷八十三吐谷渾伝)。このように陳の滅亡後、周辺諸国は隋への警戒を強めた。東突厥でも、大義公主が陳の滅亡に故国北周の滅亡を重ねて歎き、西突厥の泥利可汗と通好するなど不穏な動きを始めたため、文帝は公主に対する不信感を強めた(『隋書』突厥伝)。

当時の突厥には、漠北に大可汗の都藍可汗(沙鉢略可汗の子)、西方に達頭可汗、北方に染干(莫何可汗の子)がいた(系図、図2)。染干は最も勢力が弱かったため、文帝に通婚を請願した。文帝は大義公主の排斥を画策していたため、染干に対し、公主の謀殺を通婚の条件として提示した。染干はそこで都藍可汗に公主を讒言し、怒った可汗は大義公主を殺害した。文帝は染干を突厥離間のための駒となし、開皇十七年(五九七)、安義公主を降嫁させ、都藍可汗に対抗させた。都藍可汗は隋から軽視されたため激怒し、達頭可汗と連合して染干を攻撃し、染干の兄弟や子供を殺害した。このため染干は開皇十九年(五九九)、隋に内附した。文帝は染干を意利珍豆啓民可汗に冊立し、安義公主が死去していたため義成公主を改めて降嫁させ、染干を支援した(『隋書』突厥伝、『資治通鑑』卷一七八)<sup>(21)</sup>。その後、文帝が大規模な軍勢を出動させて都藍可汗の討伐を試みると、都藍は部下に殺害された。次いで漠北に入った達頭可汗も、隋との交戦を継続するもの

の、仁寿三年(六〇三)、長孫晟の教唆を受けた鉄勒、僕骨等の十餘部が叛いて啓民可汗(染干)に帰順したため大敗し、吐谷渾に逃亡した。啓民可汗は達頭可汗の部衆を尽く掌握し、鉄勒、奚、霫などの諸族も勢力下に収め、毎年朝貢し隋に忠義を尽くした(『隋書』長孫晟伝、突厥伝、『資治通鑑』卷一七九)。

啓民可汗が帰順すると、次代の煬帝は、次章で詳細に見るように啓民可汗に契丹討伐を行わせるなど、「以夷制夷」策によって効率的に周辺諸国の征圧を試みた。

なお、文帝が染干に安義公主を降嫁させ、突厥への離間を開始した開皇十七年(五九七)の前後、文帝は吐谷渾と高句麗に対しても行動を起こしている。即ち、開皇十六年(五九六)、吐谷渾の世伐に光化公主を嫁がせ、和親した。また、高句麗が靺鞨を率いて遼西を攻撃したため、開皇十八年(五九八)、文帝は水陸三十万の軍勢を派遣し高句麗を征伐した。この遠征は失敗に終わったが、高句麗が謝罪したため文帝はこれを許し、高句麗に深入りする事なく矛を収めた。

文帝は、開皇九年(五八九)に中華の再統一を果たしたため、開皇十六年(五九六)頃から、北方、東方、西方に対する世界戦略を展開し、開皇十七年(五九七)、突厥に対する離間策を開始したと考えられる。

(二) 煬帝による西突厥への離間策(大業六年頃〜大業七年)

仁寿四年(六〇四)、文帝が崩御し、煬帝が即位したが、煬帝は、治世の初めには概ね文帝の外交政策を継承した。文帝が中華の再統一を完遂し、北方の大きな脅威であった東突厥も掌握して政治的な安定を得たため、煬帝は、経済的な利益を求め、大きな利潤をもたらす東

西交易路と西域諸国に目を向けた。しかし、西方では西突厥と吐谷渾が東西交易路を掌握していたため、煬帝は、西突厥、及び吐谷渾の攻略を次なる目標に掲げた。

大業四年（六〇八）頃、煬帝は、西突厥の泥獞処羅可汗（木杆可汗<sup>(22)</sup>の曾孫、系図参照）に対し会見を求めた。しかし、泥獞処羅可汗は国人の反対を受けたため、煬帝との会見を拒否した。

大業六年（六一〇）頃、西突厥の一首長射置可汗が、煬帝に対し通婚を請願した。射置可汗は、かつての西面可汗、達頭可汗の孫であり、祖父以来、一門は代々西突厥に君臨していたが、この頃には位を失って一首長に落ち、泥獞処羅可汗に服従していた（『隋書』卷八四西突厥伝、系図）。射置可汗は、勢力を取り戻すため、隋からの権威付けを欲し、煬帝との通婚を希望したと思われる。

このとき黄門侍郎の裴矩は、煬帝に向かつて、射置可汗を優遇し泥獞処羅可汗に対抗させ、西突厥を分裂させるべきであると進言した。煬帝は裴矩の進言を容れ、射置可汗に対し、「おまえを大可汗に立てるゆえ、出兵して泥獞処羅可汗を殺せ。さすれば通婚を許可しよう」と返答した。すると射置可汗は奮い立ち、煬帝の命令に従って泥獞処羅可汗を襲撃し、大いに打ち破った（『隋書』西突厥伝）。こうして、弱小の射置可汗を扇動し泥獞処羅可汗を攻撃させて、西突厥を分裂させるという煬帝の外交戦略は成功を取めた。

なお、大敗した泥獞処羅可汗は、大業七年（六一一）、数千の騎兵だけを率いて東に逃走し、隋に亡命した。すると煬帝は、射置可汗ではなく、泥獞処羅可汗を支援し、西突厥の可汗に擁立しようと試みる。煬帝は泥獞処羅可汗を庇護すると、信義公主を降嫁させ、可汗のため

に旧領の奪還も計画した（『隋書』西突厥伝）。しかし、煬帝による泥獞処羅可汗の擁立計画は、その後、三度の高句麗遠征が失敗した事や煬帝自身の死去などにより、実現しなかった。

### （三）三度の高句麗遠征失敗後の煬帝の東突厥に対する離間策

（大業十一年）

煬帝が、大業八年（六一二）〜大業十年（六一四）、三次に亘る高句麗遠征に失敗すると、東突厥の始畢可汗（啓民可汗の子）の勢いが盛んになった。そこで裴矩は煬帝に向かつて、「始畢可汗の弟の叱吉設に公主を降嫁させて南面可汗となし、突厥の勢力を分裂させるとよい」と進言し、叱吉設に対して公主の降嫁と南面可汗への冊立を提案した。しかし、叱吉設は隋の申し出を断った。このため、突厥に対する隋の離間策は失敗した。だが、始畢可汗は、隋が離間策を仕掛けた事を知り、隋を怨むようになった。

また、このとき裴矩が、始畢可汗の寵愛する謀臣・史蜀胡悉を、互市と偽って馬邑（山西省）に誘き出して殺害したため、始畢可汗は遂に朝貢を停止し、大業十一年（六一五）、自ら数十万の騎兵を率いて、北巡中の煬帝を雁門（山西省）で包囲した（『隋書』卷六七裴矩伝、<sup>(23)</sup>『資治通鑑』卷一八二）。

突厥への離間策は、「遠交近攻」策など文帝時代の突厥攻略であるが、今回はそれが突厥に通用しなかった。突厥は、三度も高句麗遠征に失敗した隋を侮ったと思われる。叱吉設が、公主降嫁や冊立といった隋からの権威付けに魅力を感じなかった事、外征失敗による北辺防備体制の弛緩により、始畢可汗の雁門への侵攻が容易になった事などが考えられる。<sup>(24)</sup>外交の成功には力を背景とする事が、如実に見て取れ

よう。

#### 第四章 隋の周辺諸国家に対する「以夷制夷」の外交策

隋は、北方の突厥帝国を重層的かつ反復的な離間策などにより弱らせ、東突厥を帰順させた後、西方の吐谷渾および北東の契丹に勢力を拡張しているが、その際、東突厥や鉄勒など臣従した国家を利用してゐる。つまり、隋は「以夷制夷（夷を以て夷を制する）」とも言える巧みな外交政策によって効率的に周辺諸国の制覇や勢力拡張を図っている。隋のこの「以夷制夷」は、軍事面のみならず、帰順した東突厥の啓民可汗による周辺諸国への説得などの形で、外交面でも見られる。

本章では、この隋の周辺諸国家に対する「以夷制夷」の外交政策を中心に、隋の世界戦略の外交的展開を見ていくことにする。まず第一節において、周辺国（突厥、鉄勒）の軍隊を利用した隋による周辺国の討伐、次いで第二節において、武力行使ではなく臣従した突厥可汗の説得という外交的圧力によって周辺国に帰順を促したことが、最後に第三節で、突厥の諸可汗へのシンボル授与による隋朝權威の浸透を取り上げる。

##### （一）臣従した国の武力を用いた周辺国の討伐

煬帝は、契丹を討伐する際に東突厥の啓民可汗の加勢を得、吐谷渾を征伐する時には、先に鉄勒に吐谷渾を攻撃させ、その後、隋軍が吐谷渾を攻めて決定的な打撃を与えている。本節では、『隋書』『旧唐書』『資治通鑑』から契丹討伐と吐谷渾討伐に関する記述をまとめ、隋による「以夷制夷（夷を以て夷を制する）」策の意義について考え

る。【表2】も参照。

（一）大業元年（六〇五）、東突厥の啓民可汗の加勢を得て契丹を討伐  
『旧唐書』卷七五韋雲起伝、『資治通鑑』卷一八〇、大業元年条には、以下のよう記されている。

大業元年（六〇五）、契丹が營州（遼寧省）を襲撃したため、煬帝は、隋の通事謁者・韋雲起に対し、突厥と連合して契丹を討伐するよう命じ、啓民可汗に騎兵二万を率いさせ、韋雲起の指揮下に配属させた。

契丹は、かつて、突厥の沙鉢略可汗に従属し、突厥から派遣されてくる吐屯（監察官）に統轄されていた（『隋書』卷八四契丹伝）。吐屯というのは、突厥が、契丹、室韋、西域諸国などの従属国に派遣した監察官であり、これらの諸族や諸都市から貢納を徴収する事が任務であった。<sup>25)</sup>つまり、契丹は、かつて突厥に臣従していたのである。

そこで、韋雲起は、契丹の国境に入ると、啓民可汗に命令し、突厥は柳城郡（遼寧省）に向かっている事、突厥は高

【表2】臣従した国の武力を用いた周辺国の討伐

隋の命令	年代	討伐の詳細	典拠
突厥の啓民可汗に契丹討伐を命令	大業元(605)	契丹が營州を襲撃・略奪したため、煬帝は韋雲起に対し、啓民可汗と共に契丹を討伐するよう命令。啓民可汗は2万の騎兵を率い、韋雲起と共に契丹を襲撃し男女4万人を捕虜とした	旧唐書75韋雲起伝、通鑑180大業元年
鉄勒に吐谷渾討伐を命令	大業4(608)	鉄勒が煬帝に謝罪し降伏を願ったため、煬帝は鉄勒に吐谷渾討伐を命令。鉄勒が吐谷渾を撃破したため、吐谷渾王の伏允は東に逃走し西平に移動。そこで煬帝は宇文述を派遣し吐谷渾を曼頭城、赤水城で撃破。その後、西海・河源・鄯善・且末等の四郡を設置	隋書83吐谷渾伝、通鑑181大業4年7月

※略号：隋書＝『隋書』、旧唐書＝『旧唐書』、通鑑＝『資治通鑑』

句麗と交易する事を、偽って契丹に告げさせた。更に、韋雲起は啓民可汗に対し、「突厥の陣中に隋の使節がいる事を契丹に言ってはならない。もし、この事を漏らせば、斬る」と言った。

このため、契丹は啓民可汗の言葉を信じ、防備を怠った。つまり、契丹は、突厥は高句麗との交易が目的でこの地に到来したのであり、契丹を攻める意図はないと判断して警戒心を持たなかったのである。更に、啓民可汗が隋軍の到来を秘したため、契丹は、隋の討伐軍が到来した事を知らなかったのであった。

韋雲起は、契丹を欺くため一旦南に向かったが、夜になると引き返してきて契丹の陣地から五十里の場所に宿衛した。そして、夜が明けると、韋雲起率いる隋軍と啓民可汗の率いる突厥軍は、ともに騎兵を馳せて契丹の陣地を襲撃し、契丹の男女四万人を捕縛した。韋雲起は、契丹の男を殺し、女と畜産の半分を突厥に褒賞として授け、その他の戦利品を収めて隋に帰還した。煬帝は大いに喜び、韋雲起を治書御史に抜擢した。<sup>26)</sup>

このように、隋は突厥の加勢も得て効率よく契丹を征伐した。それに加えて、突厥に契丹を攻撃させた事は、突厥と契丹の間に楔を打ち込み、将来的には、両者の連繫を阻止する事にも繋がったと思われる。

(2) 大業四年(六〇八)、鉄勒に吐谷渾を討伐させる  
煬帝は、西方の東西交易路や西域諸国の掌握を画策し、大業四年(六〇八)、東西交通路を扼する吐谷渾を攻略した。

吐谷渾は、南北朝時代、東西交易路を掌握し、経済上の利潤を基盤に勢力を拡張したが、南朝の宋や齊と連繫して北魏を牽制し、東魏と連繫し西魏を牽制するなど、外交上も重要な役割を担った。吐谷渾は

隋の建国当初、涼州、弘州、廓州、臨洮(以上甘粛省)を襲撃したが、文帝が中華を再統一すると、隋に脅威を感じ、文帝に対し、娘を後宮に差し出したいと請願する事もあった。そこで、文帝は光化公主を吐谷渾の世伏に降嫁させ、和親した。煬帝が即位すると、吐谷渾の伏允は息子を入朝させ、引き続き隋に対して誠意を示した<sup>27)</sup>、『隋書』卷八三吐谷渾伝、『資治通鑑』卷一七五。

しかし、吐谷渾は、大業初め(六〇五年頃)、涼州、張掖(甘粛省)などを襲撃した(『隋書』卷三九陰世師伝、卷五一長孫熾伝)。更に、黄門侍郎の裴矩が、「西域諸国を掌握するためには、西域からの朝貢路を遮断する吐谷渾を排除すべきである」と進言した事(『隋書』裴矩伝、『資治通鑑』卷一八〇)もあって、煬帝は吐谷渾の討伐に着手した。

その際、煬帝は、裴矩の「以夷制夷」の外交戦略を採用し、隋の討伐軍を派遣して吐谷渾を攻撃する前に、恭順したばかりの鉄勒に対し、吐谷渾討伐を命じた。

ここで、隋と鉄勒の関係について少し説明しておく。大業三年(六〇七)、鉄勒が西方辺境を襲撃した。これに対し、煬帝は馮孝慈を敦煌から出撃させ、鉄勒に応戦させたが、馮孝慈は敗北した。しかし、この後、鉄勒が遣使して煬帝に謝罪し、降伏を請願したため、煬帝は裴矩を派遣して鉄勒を慰撫させた。このとき、裴矩は鉄勒に対し、「吐谷渾を攻撃して、隋への誠を尽くすように」と、命令したのであった。鉄勒は、隋の命令に即応し、大業四年(六〇八)、吐谷渾を襲撃し大いに打ち破った。吐谷渾の伏允は東に逃走し、西平(鄯州)の国境地帯を保持した。<sup>28)</sup>煬帝は、これを好機と見て宇文述を派遣し、

吐谷渾の伏允を曼頭城、赤水城で攻撃した。伏允が党項に逃亡したため、大業五年（六〇九）、煬帝は西海・河源・鄯善・且末等の四郡を設置して隋の支配下に掌握した（『隋書』卷三煬帝紀、卷六一宇文述伝、吐谷渾伝、『資治通鑑』卷一八一）。

なお、鉄勒は大業三年（六〇七）、遣使して煬帝に方物（特産品）を献上し、それ以降、朝貢を欠かさなかった（『隋書』卷八四鉄勒伝）。つまり、帰順したばかりの鉄勒にとっても、吐谷渾討伐は、煬帝に誠意と忠誠心を示す機会になったと考えられる。

以上のように、隋は、先に外交的圧力を用いて周辺国同士を戦わせ、弱体化したところを隋軍が止めを刺し征圧するという巧妙な方法も用いて周辺国を掌握した。また隋は、帰順したばかりの鉄勒に吐谷渾を征伐させて、鉄勒の忠誠心を試したのである。

（二）東突厥の啓民可汗を利用した煬帝による周辺諸国への感化

煬帝は、帰順した周辺国家（突厥や鉄勒）の武力を利用して周辺諸国（契丹や吐谷渾）を屈服させるだけでなく、智略によって周辺諸国を臣従させてもいる。つまり、東突厥の啓民可汗を利用して、非軍事的に周辺の諸国や諸族に隋の威光を示す事もあった。【表3】も参照。

大業三年（六〇七）、煬帝は榆林（内蒙古自治区）に行幸すると、塞の外に出て軍を練兵し、武威を輝かせながら東突厥を経由して涿郡（河北省）に赴きたいと考え、まず長孫晟を啓民可汗のもとに派遣し、煬帝の到来を伝えさせた。啓民可汗が、突厥に従属する奚、霫、室韋等の酋長数十人を集め、長孫晟から煬帝の意向を拝聴すると、長孫晟は隋の威光を諸族に示す好機と考え、啓民可汗に草を刈らせた。すると、可汗自らが草を刈る姿を見た突厥の貴人達や諸部族は、可汗に倣

い、争って草を刈った。なお、このとき、突厥は国を挙げて労役に就くと、榆林の北境から啓民可汗の牙帳まで草を刈り、そこから更に東に向かつて涿郡の薊県（河北省）まで、全長三千里、幅百歩の御道を造ったようである。煬帝は、長孫晟の話の聞くと、たいそう喜んだ。<sup>(29)</sup>

長孫晟は、自ら草を刈って隋に臣従する啓民可汗の姿を、突厥人だけでなく、突厥に従属する奚、霫、室韋等の諸族長にも見せつけ、広く隋の威光を知らしめたのであった。

こうして長孫晟が隋の威信を充分に示した後、煬帝が啓民可汗の陣幕を訪問した。このとき啓民可汗のテントに高句麗の使者が来ていたが、可汗は高句麗の使者を隠さず、煬帝に見せた。すると煬帝は高句麗の使者に対し、「来年、朕は涿郡に行くつもりである。なんじは帰国したら、王に早く来朝するよう告げよ。もし高句麗王が来朝しないなら、朕は必ず啓民可汗を率いて高句麗に巡行するであろう」と言った。このため、高句麗の使者は非常に恐れた。<sup>(30)</sup>このように煬帝は高

【表3】外交的圧力や智略・感化によって周辺諸国を帰順させようとした事例

年代	詳細	典拠
大業3 (607)	長孫晟は、自ら草を刈って隋に臣従する啓民可汗の姿を、突厥人だけでなく、突厥に従属する奚、霫、室韋等の諸族長にも見せつけ、広く隋の威光を知らしめた	隋書51長孫晟伝、通鑑180大業3年
大業3 (607)	煬帝は、高句麗の使者に対し「王が来朝しなければ東突厥の啓民可汗を率いて高句麗に巡行する」と言い、高句麗王の来朝を促す	隋書84突厥伝、通鑑181大業6年
大業4 (608)	西突厥の泥暹羅可汗が傲岸で、起立して煬帝の勅書を受け取らなかったため、司朝謁者の崔君肅は「隋に臣従して勅書を拝さないのなら、隋は啓民可汗と連合して西突厥を攻撃するぞ」と警告。泥暹羅可汗は驚き、起立し再拝すると跪いて勅書を拝受した	隋書84西突厥伝、通鑑181大業4年

※略号：隋書＝『隋書』、通鑑＝『資治通鑑』

高句麗王に対し、啓民可汗を伴って高句麗に赴くと行って威嚇し、高句麗王の来朝を促したのである。(しかし、高句麗は、隋が強国突厥を屈服させ、使役した事も知って、逆に、隋には絶対に服従できないとの決意を強く抱いた可能性もある。)

なお煬帝は、この翌年の大業四年(六〇八)二月、啓民可汗の名を出して西突厥の泥掘処羅可汗を跪かせている。煬帝は、司朝謁者の崔君肅を西突厥に派遣し、泥掘処羅可汗に勅書を与えたが、泥掘処羅可汗は傲岸で、起立して勅書を受け取ろうとしなかった。そこで崔君肅は、「いま東突厥の啓民可汗は、隋と連合して西突厥を滅ぼそうと考えている。もし、なんじが隋に臣従して勅書を受け取れば西突厥は安泰でいられるだろう。しかし、なんじが起立して勅書を受け取らないのであれば、隋は東突厥(北蕃)の啓民可汗に加勢して西突厥を攻撃するぞ」と警告した。すると泥掘処羅可汗は驚き、起立し再拜すると、跪いて勅書を拝受した。<sup>31)</sup>

このように、隋は、まだ恭順していない周辺国家に対して、武力を行使する事なく、先に帰順した周辺国を巧みに利用して臣従を促す事もあった。

(三) 突厥の諸可汗への「支配」を象徴するシンボルの授与とその外 交上の効果

隋は、突厥の諸可汗を懐柔する際、彼らの感性に沿った方法で勢力の浸透を図ることもあった。遊牧政権である突厥では、諸可汗が各地に分立していたため、隋は諸勢力に対して「小外交」を展開し、可汗にとって「支配」や「正統性」の象徴となる「狼頭纛」や「箭」を与えて、内訌を助長している。

本節では、突厥、及び西突厥に対する隋からの「支配を表すシンボル」の授与の事例を取り上げ、外交上の効力について考察を加える。【表4】も参照されたい。

(一) 達頭可汗への「狼頭纛」の授与

文帝は、開皇元年(五八一)、西面可汗の達頭可汗に対し、「狼頭纛」を授けた。

狼頭纛というのは、狼頭の旗印(または旗)である。突厥可汗の阿史那氏は、伝説によれば狼を始祖とするため、祖先を忘れぬよう牙門(本陣の門)に狼頭纛を建てた(『隋書』突厥伝)。つまり、狼頭纛は「可汗の正統性を象徴する重要なシンボル」であった。<sup>32)</sup>第二章で見たように、開皇二年(五八二)、沙鉢略可汗が、達頭可汗を初めとする四人の可汗を統轄し、四十万の

【表4】突厥の諸可汗への支配のシンボル授与

年代	対象	シンボル	事柄、隋の意図及び離間政策	典拠
開皇元(581)	達頭可汗	狼頭纛 (狼頭の旗印)	突厥に対する離間政策として、文帝は達頭可汗に「狼頭纛」を与え、達頭可汗の使者を沙鉢略可汗の使者よりも上座に置いた。「狼頭纛」は突厥では可汗のシンボルであった(護1967)	隋書84突厥伝、通鑑175太建13年
開皇7(587)	莫何可汗 (処羅侯)	鼓吹幡旗 (太鼓、ふえ、のほり、はた)	文帝は処羅侯を莫何可汗に冊立し、鼓吹幡旗を下賜。莫何可汗がこの旗鼓を持って阿波可汗を討伐すると、阿波可汗の兵士は旗を見て隋の援軍が到来したと勘違いし、多くのものが降伏。阿波可汗は捕縛された	隋書84突厥伝、通鑑176禎明元年
大業6(610)	西突厥の射置可汗	箭 (矢)	煬帝は射置可汗に「桃竹白羽の箭」を授け、泥掘処羅可汗の討伐を命令。「箭」には矢のように速く討伐せよとの意味が込められていた。また西突厥では「箭」は王権のシンボルでもあった(内藤1988)。隋から大可汗として認められた射置可汗は奮い立ち、泥掘処羅可汗を撃破	隋書84西突厥伝、通鑑181大業7年条

※略号：通鑑=『資治通鑑』、護1967=護雅夫「突厥第一帝国における qayan 号の研究」(『古代トルコ民族史研究 I』山川出版社、1967年)、内藤1988=内藤みどり「西突厥史の研究」(早稲田大学出版部、1988年)。

大軍を率いて大々的に入寇したため、文帝は「遠交近攻」策によって突厥の離間を図り、達頭可汗の懐柔を試みた。達頭可汗は、大可汗の沙鉢略よりも強大な兵力を保有する実力者であったが、その下位に甘んじていたため、内心では沙鉢略に反感を持っていた。長孫晟はそれを見抜き、達頭可汗を扇動すれば沙鉢略に戦いをしかけるはずだと、文帝に進言した。<sup>(33)</sup>そこで文帝は、達頭可汗のもとに太僕の元暉を派遣し、「狼頭纛」を授け、達頭可汗の使者が来朝すると沙鉢略の使者よりも上座に置いて優遇した。

文帝は、「狼頭纛」の授与によって達頭可汗を大可汗として承認し、沙鉢略可汗に対抗させたのである。この策略は成功し、開皇二年（五八二）、沙鉢略可汗が四十万の大軍を率いて入寇した時、達頭可汗は当初は沙鉢略可汗に付き従ったものの、沙鉢略可汗が更なる南下を試みた際には、従わず、撤退した。このため、沙鉢略可汗は退却を余儀なくされ、隋は突厥の猛撃を凌ぐ事ができたのであった。

#### (2) 射置可汗への「桃竹白羽箭」の授与

第三章でも見たように、煬帝は、西突厥を分裂させるため、泥掘処羅可汗に対し、一首長の射置可汗を対抗させた。

大業六年（六一〇）、煬帝は射置可汗に対し、大可汗への冊立や通婚を条件となして泥掘処羅可汗を攻撃させ、「桃竹白羽箭（やがらが桃竹で羽根の白い矢）」を与え、「事は急を要する。矢が飛ぶように速やかに行なえ」と命令した。<sup>(34)</sup>つまり、「箭」には「矢のように速く討伐せよ」との意味が込められていた。

なお、「矢」は突厥で重要な意味を有し、課税や徴発の際、突厥人は木に刻んで数を記し、「黄金の鏃の矢」によって蠟で封をして印を

押し、信用のしるしとした（『周書』卷五〇突厥伝）。また、後代の事例ではあるが、西突厥は唐代では十部族から成り、一部族が各々一本の矢を有したため、西突厥の事を『旧唐書』卷一九四下突厥伝下は「十箭」、突厥碑文は「オン・オク（十本の矢）」と記している。つまり、西突厥で「箭」は王権や統治権を示す重要なシンボルと見なされたようである。<sup>(35)</sup>

煬帝から「箭」を賜った射置可汗は、泥掘処羅可汗を猛攻撃して大いにこれを打ち破った。射置可汗は、隋から大可汗に承認されたと判断し、煬帝の思惑通り、奮起して泥掘処羅可汗を攻めたと思われる。

#### (3) 莫何可汗への「鼓吹幡旗」の授与

隋は、先述のように、突厥が王権や正統性の象徴と見なす「狼頭纛」や「箭」を与え、巧妙に内紛を煽ったが、隋が味方であるという事を示すシンボル（旗など）を与えて可汗を後押しする事もあった。第二章でも見た通り、開皇七年（五八七）、処羅侯が即位すると、文帝は莫何可汗に冊立し、「鼓吹幡旗（太鼓、笛、のほり、旗）」を賜わった。策略に長じる莫何可汗が、この「旗鼓」を持って阿波可汗を攻めると、阿波可汗の兵士は「旗鼓」を見て隋の援軍が到来したと思い、莫何可汗に降伏した。このため、阿波可汗は莫何可汗によって生け捕りにされた。<sup>(37)</sup>このように、莫何可汗は隋の「旗鼓」も使って阿波可汗との戦いに勝利したようである。

なお、文帝は、これより先の開皇五年（五八五）頃、沙鉢略可汗に対し、「車服、鼓吹」を賜っている。この後、沙鉢略可汗は阿波可汗を攻め、これを撃破している（『隋書』突厥伝、『資治通鑑』卷一七六、至徳三年（五八五）開皇五）。このとき沙鉢略が、文帝より拝領した

「鼓」を持って阿波可汗を攻撃したか否かは不明であるが、隋の後押しも有利に作用して、勝利を収められたようである。また、煬帝も大业三年（六〇七）啓民可汗に「鼓吹幡旗」を授けている（『隋書』突厥伝、『資治通鑑』卷一八〇）。

以上のように、文帝や煬帝は突厥の諸可汗に対し、「狼頭纛」や「箭」といった可汗の象徴を授けて懐柔すると内訌を煽った。そして、突厥国内でも隋から授かったシンボル（旗や鼓）を利用し、敵対者を撃破するものが現れるなど、隋の力の浸透も見られる。

本章で見た隋の外交をまとめると、隋は、まだ恭順していない周辺国に対して、先に帰順した周辺諸国を効率よく利用し、時にはその武力的支援により屈服させ、時には帰順した国からの説得など外交的圧力や感化によって勢力下に組み込んでいった。また隋は、突厥の諸可汗に対しては、彼らの感性に沿った方法で隋の力を浸透させ臣従させていった。

## 第五章 公主降嫁や通婚を用いた北方・西方に対する隋の和親策と離間策

隋は、北方、及び西方を攻略する際に、和蕃公主の降嫁政策も実施し、文帝が四名（養女となった北周の千金公主を含む）、煬帝が二名の計六名の公主を、突厥、西突厥、吐谷渾、高昌に各々降嫁させた（系図）。ただし、通常の公主降嫁は、国家対国家であるが、隋での公主降嫁は、それとは異なり、突厥という遊牧国家内にいる諸勢力（諸可汗）とも通婚を行っている。つまり、隋は突厥、及び西突厥に対し、公主の降嫁政策においても「小外交」を実施し、懐柔を試みてい

る。（もちろん、隋は、対国家としての公主降嫁も積極的に行っており、例えば、吐谷渾や高昌にも公主を降嫁させている。）

和蕃公主を通じて周辺国家と友好関係を樹立するという外交政策は、前漢と唐でも行われており、隋もまた、中華諸王朝の常套手段に則り、周辺諸国と親善するために公主降嫁を活用した。だが、隋の公主降嫁は、単に「和親のための外交政策」であっただけでなく、「離間のための外交戦略」でもあった。

隋の和蕃公主の戦略的意義に関しては前稿でも論じたので、第一節で和親のための公主降嫁、第二節で離間のための公主の降嫁と通婚の提案について、要点のみをまとめておく。

### （一）和親策としての公主降嫁

周辺諸国と和睦する目的で行われた隋の公主降嫁は以下にあげる五例であるが、和親策としての公主降嫁は他の王朝でも見られるため、ここでは簡単に見ておく事にする。①隋の建国当初、突厥の沙鉢略可汗は、北周の公主であった妻の千金公主に扇動され、大挙して入寇したが、文帝の「遠交近攻」策により突厥が東西に分裂し、窮地に陥った。このため千金公主は文帝に請願して養女となり、大義公主に改封された。文帝は、養女の大義公主を通じて沙鉢略と舅婿関係を結び、和睦した。②文帝は、東突厥の染干（啓民可汗）を懐柔するため、まず安義公主、その死後には義成公主を嫁がせた。染干への公主降嫁は、次節で見るように東突厥を離間する狙いもあった。③吐谷渾と和するため、文帝は光化公主を嫁がせた。④東西交易路の要衝高昌を掌握するため、煬帝は華容公主を高昌王麴伯雅に嫁がせた。⑤西突厥の泥彌処羅可汗を懐柔するため、煬帝は信義公主を降嫁させた。

このように、隋は公主降嫁によって突厥（東西突厥）、吐谷渾、高昌と親善を強化したが、次節に見られるように、公主の降嫁政策を「離間」のための重要な手段としても活用した。

(二) 離間策としての公主降嫁、及び、通婚の提案

隋は、本節で見えるように、東突厥及び西突厥に対し、離間の手段としても公主の降嫁や通婚の提案を活用し、可汗同士の対立抗争を煽って、勢力の弱体化を図った。

東突厥や西突厥に対して、離間のために隋が行った公主降嫁と通婚の提案は、以下にあげる三例である。①東突厥の大可汗の都藍可汗と小可汗の染干（後の啓民可汗）が、各々文帝に対し、公主の降嫁を請願した際、長孫晟が「都藍可汗は反覆常ないので、弱小の染干に公主を降嫁させて都藍可汗に対抗させるのがよい」と進言したため、文帝は開皇十七年（五九七）、染干に安義公主を降嫁させ、都藍可汗に対抗させた（『隋書』長孫晟伝、『資治通鑑』卷一七八）。②大業六年（六一〇）、西突厥の射置可汗が煬帝に通婚を請願した時、煬帝は泥獞処羅可汗の殺害を通婚の条件にあげ、射置可汗に泥獞処羅可汗を攻撃させた。③大業十一年（六一五）、東突厥の始畢可汗が強大化したため、隋は可汗の弟叱吉設に対し、公主の降嫁と南面可汗への冊立を提案し突厥の分裂を画策した。だが、叱吉設が隋の提案を拒絶したため離間策は失敗したのみならず、隋の策謀が始畢可汗を怒らせ、大業十一年八月、煬帝が雁門で突厥軍数十万に包囲される事態となった。

また、文帝は開皇十三年（五九三）、大義公主（北周の千金公主）の殺害を画策した。このとき、染干が文帝に対し通婚を請願したため、文帝は「大義公主を殺害すれば、隋との通婚をゆるす」と返答した。

そのため染干は、都藍可汗に対して大義公主を讒言し、公主を殺害させた（『隋書』突厥伝、『資治通鑑』卷一七八）。このように、隋は、反隋勢力（大義公主）の排斥を通婚の条件に挙げ、成功を収めた。この成功例から、隋は、後に西突厥の射置可汗が通婚を懇願した際、「泥獞処羅可汗の殺害」を通婚の条件として提示し、西突厥の内訌を画策したと考えられる。

更に、公主の降嫁には、周辺国同士の連繫を阻止する効果もあった。啓民可汗は、吐谷渾と通好し、吐谷渾の女性を妻となし息子（後の頡利可汗）も儲けていたが、義成公主が降嫁すると可汗は隋の威光を恐れ、吐谷渾との通好を絶った（『隋書』西突厥伝）。なお、突厥や西突厥は西域諸国の王に娘を嫁がせ、婚姻も通じて支配力を強化しており、高昌には突厥可汗の娘が嫁いでいた（系図）。高昌への華容公主の降嫁には、高昌と突厥（西突厥）との間に楔を打ち込む意味もあったと思われる。

以上のように、隋は、公主降嫁や通婚を利用し、突厥の内訌の助長、反隋勢力の排除、周辺国同士の連繫阻止などの効果をあげた。

おわりに（隋の外交のまとめ）

最後に、本稿で考察した北方、西方に対する隋の外交戦略をまとめ、締め括りとしたい。

隋は、建国時より襲来する強大な遊牧帝国・突厥への対策が必要であったため、文帝は「遠交近攻」策によって突厥の内訌を煽り、突厥を東西に分裂させ、弱体化させた。その際、隋は諸可汗に対し、「狼頭讒」や「箭」といった王権の象徴を与え、内紛を煽る事もあった。

一方、可汗の中には隋から授かったシンボル（旗や鼓）を利用してライバルを倒すものもあり、隋の力の浸透も見られる。

なお、遊牧騎馬民族の国家・突厥では、諸可汗が各地に分立していた。このため隋は、突厥国内の諸勢力を離間する目的で諸可汗に対し「小外交」を行い、可汗の支配を表すシンボルの授与や公主の降嫁によって、懐柔と同時に、突厥内部の諸勢力の離間をも図った。

また、隋は、周辺諸国を制圧、もしくは帰順させる際、「以夷制夷（夷を以て夷を制する）」とも言える外交政策によって効率的に周辺国家の制覇や勢力拡大も試みている。その際、臣従した周辺国の武力を用いて隣国を討伐させる事もあれば、武力行使を行わず、先に帰服した周辺国の説得などによって周辺諸国を恭順させる事もあった。

隋は、まだ帰順していない周辺諸国を征伐するために、すでに帰順した周辺国家に命じて攻撃させた。そのメリットとして、以下のことが上げられよう。①周辺国家に周辺国の討伐を実行させる事によって、隋の兵力や国力の消耗を防ぐ事が可能となる。それと同時に、討伐軍を派遣する国の国力・兵力を削ぐ事もできる。②隣接する周辺国同士の間を断ち、隋への依存度を高める事ができる。③隋の命令に応じるか否かで、その国家の隋に対する忠誠心の度合いを測る事ができる。隋の命令を拒否すれば、その国は次のターゲットの候補になる。更に、隋は北方と西方に対し、和蕃公主を降嫁させて親善関係を築くという、中華諸王朝にとって常套手段ともいえる外交政策も実行したが、隋は、公主降嫁を和親策としてのみならず、離間策としても活用した。離間策としての公主降嫁や通婚の提案によって、隋は、突厥の内紛の助長、反隋勢力の排斥、周辺諸国間の連繫阻止などの成果を

あげた。

しかし、煬帝が三度の高句麗遠征（六一二～六一四年）に失敗すると、隋の外交の威力にも陰りが見え始める。大業十一年（六一五）、煬帝は東突厥に対して離間策を講じたが、公主降嫁も冊立も、突厥側に拒絶された。のみならず、始畢可汗が隋を侮って侵攻し、煬帝が包囲されて生命を脅かされる程の危機的状況に陥った。統一中華の力に裏打ちされていたからこそ、隋の外交も効力を発揮し、周辺諸国も屈服していたと考えられる。力なき外交は無効であり、逆に周辺国の侮りを受け、破綻していったと言えよう。

最後に、隋の外交政策を大きなスコープで俯瞰してみよう。隋の前後の時代、即ち前代の南北朝時代、後代の唐の対外政策を各々取り上げて隋の外交と比較検討し、隋が分裂期の南北朝時代の外交をどのように継承したのか、また隋の外交戦略が次代の唐によって、どの程度継承されたのかを、簡単に見ておきたい。

分裂期には、敵を圧倒するため、外交を巧く活用して周辺国と連繫する事が重要となった。そのため、南北朝時代、諸国は外交をうまく利用しライバルに対抗した。例えば、南朝の宋と齊は、柔然、吐谷渾と連繫し、北魏を牽制した。<sup>(40)</sup> 東魏は、南の梁、北の柔然、西の吐谷渾と連繫して西魏包囲網を形成し、対する西魏は、東魏の包囲網を打破するため、新興の突厥と通好した。また、北周は、北齊と華北の覇権を争って対立していたため、外交もうまく利用し、北の突厥、東の北齊、南の陳に各々対応していった。北周は、まず突厥と婚姻を結んで同盟関係を築くと、南朝の陳とも連繫して北齊を滅ぼし、北齊滅亡後は陳を攻めて、打撃を与えた。<sup>(41)</sup>

このように、分裂期の南北朝時代、各国は、合従連衡、遠交近攻といった外交戦略によって敵対国の牽制を試みたが、前代に培われてきたこのような外交の基盤があったからこそ、文帝は、長孫晟が突厥に對する「遠交近攻」策を献言した際、即座に、その意義を理解し、実行に移す事ができたと考えられる。

隋は短命王朝ではあったが、「遠交近攻」策や「以夷制夷」策と言った優れた対外戦略は、以下に見るように、唐にも継承されたようである。

唐も建国の前後、東突厥の強盛に悩まされた。隋末、北辺で拳兵した郡雄は概ね突厥の支援を受け軍事力の充実を図ったため、李淵も他の郡雄に對抗する必要上、突厥から援軍を借りた。そのため東突厥の勢力が増大した。このとき唐は、隋が突厥に對して実施した「遠交近攻」策や「以夷制夷」策を活用し、東突厥に對応した。

例えば、高祖は、武徳八年（六二五）頃、隋の文帝・煬帝の外交のブレンであった裴矩を側近となし、「遠交近攻」の有効性を説く裴矩の進言に従って、東突厥の頡利可汗を牽制するために西突厥の統葉護可汗と通好し、婚姻同盟を試みている（『新唐書』卷一〇〇裴矩伝、『資治通鑑』卷一九二）。また太宗は、東突厥を討滅するための下準備として、頡利可汗の甥突利可汗を懐柔し東突厥の内訌を煽った（『旧唐書』卷一九四突厥伝、『新唐書』卷二二五突厥伝）。太宗は、東突厥の勢力下にあった鉄勒諸部や契丹を懐柔し、近隣諸族の切り崩しも実行した（『旧唐書』卷一九九鉄勒伝、契丹伝、『新唐書』卷二二七下回鶻伝下、『新唐書』卷二二九契丹伝）。その際、太宗は、鉄勒諸部連合の盟主であった薛延陀の夷男を真珠毗伽可汗に冊立し、鼓纛（太鼓と

旗印）を受けて懐柔した。太宗は、隋が突厥を攻略する際に実施した「遠交近攻」策や「以夷制夷」策を見做ったと思われる。また、鼓や纛を与える事も、隋の文帝が「狼頭纛」や「鼓」を与えて突厥の可汗達を懐柔した方法に做ったと考えられる。このように周辺諸族を唐側に寝返らせ、巧みに東突厥を孤立させた後、唐は貞観四年（六三〇）、東突厥の討滅を果たした。

唐は、その後も周辺諸国に臨む際、外交を重視した。例えば、高宗の時、高句麗討滅のため新羅と連合し、高句麗の莫離支・泉男生兄弟の対立も巧く利用し高句麗の討滅を図った。玄宗時代には、北の突厥、西の吐蕃への二正面作戦を回避するため、必ず、どちらか一方と和睦し、もう一方との対戦に戦力を集中した。強大な軍事力に加えて、こういった巧みな外交も手伝って、太宗期から玄宗期にかけて、唐は巨大な世界帝国として東部ユーラシアに君臨したのである。また、安史の乱後の徳宗時代や穆宗時代には、外に吐蕃・ウイグル、内に河北三鎮などの強大な勢力が控えていたため、唐は、時にはウイグルと和睦して吐蕃を牽制し、また時には吐蕃と会盟し内乱に對応するなど、外交も駆使して内憂外患を乗り切ろうと試み、安史の乱後なお一世紀半近くの命脈を保った<sup>(4)</sup>。

このように、隋と唐は、その治世の時間的なスケールは大きく異なるが、しばしば隋唐帝国と称されるように、政治的・外交的には共通する要素も多く、その意味で、隋の外交戦略は、唐の東部ユーラシア規模での勢力圏拡大の際の対外戦略のプロトタイプになったと言えるかも知れない。

特に、「以夷制夷」など、既に勢力圏に属した国家や民族を用

いて、いまだ帰服していない周辺の諸国や諸族を支配下に取り込み、勢力圏を拡大していった一連の巧みな外交戦略は、唐の外交をさえ凌ぐ秀逸さを感じさせる。しかしながら、主として外征のみによる、大軍を動員しての煬帝の三度の高句麗遠征の失敗という、上記とは対照的な愚策の故に、隋帝国はもろくも崩壊し、東部ユーラシアの中心軸は唐帝国へと引き継がれていくのである。

註

- (1) 突厥の東西分裂については、松田寿男「西突厥王庭考」(『増補版・古代天山の歴史地理学的研究』早稲田大学出版部、一九七〇年)、護雅夫「突厥と隋・唐兩王朝」(『古代トルコ民族史研究Ⅰ』山川出版社、一九六七年)、護雅夫「古代遊牧帝国」(中公新書、一九七六年)、片山章雄「モンゴル高原から中央アジアへ」(『中央ユーラシアの世界』山川出版社、一九九〇年)、森安孝夫「シルクロードと唐帝国」(講談社、二〇〇七年)等を参照。
- (2) 前掲註(1)護雅夫「一九六七」、前掲註(1)護雅夫「一九七六」、前掲註(1)松田寿男「一九七〇」、内藤みどり「西突厥史の研究」(早稲田大学出版部、一九八八年)。
- (3) 『隋書』卷五一長孫晟伝に、突厥攻略を献言する長孫晟の言葉として、「今宜遠交而近攻、離強而合弱、通使玷厥、説合阿波、則撰回廻兵、自防右地。(いま突厥に対し、遠いものと交わり近いものを攻めるといふ政策を実施し、強いものを引き離し弱い者同士を連合させれば、よろしいでしょう。つまり玷厥(＝達頭可汗)に使者を派遣して通好し、阿波可汗に連合を説けば、撰回(＝沙鉢略可汗)は軍を撤回させて撤退し、自らの右地(西方領域)を防衛しなければならなくなります。」とある。なお、「遠交近攻(遠きと交わり近きを攻める)」という政策は、戦国時代の范雎が提案した隣国攻略のための外交政策であり、遠国と連繫し隣国を挟撃する作戦である(『史記』卷七九范雎伝)。

- (4) 長孫晟は「遠交近攻」策の提議・実行で突厥を東西に分裂させたのを皮切りに、突厥への離間策や謀略を展開し、例えば、開皇十三年(五九三)、反隋であった大義公主の排斥に暗躍し、開皇十七年(五九七)仁寿三年(六〇三)、染干(啓民可汗)を支援し、都藍可汗と達頭可汗を排除した。大業三年(六〇七)、啓民可汗に草刈りを行わせ、突厥のみならず、その勢力下にあった奚、靺、室韋等の酋長などにも隋の威光を示した。

- (5) 裴矩の最初の外交活動は、開皇十三年(五九三)、大義公主の謀殺に関与した事である。主に煬帝の時代、外交の分野で活躍し、例えば、大業四年(六〇八)、鉄勒に命じて吐谷渾を討伐させ、大業五年(六〇九)、高昌などの西域諸国を懐柔し、大業十一年(六一五)、東突厥の始畢可汗の強盛を抑えるため、可汗の弟叱吉設を公主の降嫁と南面可汗への冊立によって懐柔しようと試みた。『隋書』裴矩伝など。西域諸国を招来した裴矩の活躍については、氣賀澤保規「アジア交流史からみた遣隋使―煬帝の二度の国際フェスティバルの狭間で」(『遣隋使がみた風景』八木書店、二〇一二年)等を参照。

- (6) 隋初の最大の課題が突厥対策であった事は、前掲註(5)氣賀澤保規「二〇一二」、妹尾達彦「都市と環境の歴史学(増補版)」第三集・特集東アジアの都城と葬制・隋唐長安城と漢中平野の土地利用(中央大学文学部東洋史学研究室、二〇一五年七月)三七―三九頁などを参照。

- (7) 小可汗の分立については、護雅夫「突厥第一帝国における可汗号の研究」(『古代トルコ民族史研究Ⅰ』一九六七年)、鈴木宏節「突厥阿史那思摩系譜考―突厥第一可汗国の可汗系譜と唐代オールドスの突厥集団」(『東洋学報』第八七卷第一号、二〇〇五年)、小可汗が外交交渉の権限を持っていた点については、平田陽一郎「周隋革命と突厥情勢―北周・千金公主の降嫁を中心に」(『唐代史研究』第一二号、二〇〇九年)を参照。

- (8) 四代目の大可汗・佗鉢可汗は、兄の木杆可汗(三代目大可汗)から譲位された恩義に報いるため、息子の菴羅に対し、木杆可汗の息

子阿波可汗に位を譲るよう遺言した。だが、阿波可汗の母の身分が低かったため国人が納得せず、摂図の意見が反映されて菴羅が五代目の大可汗に推戴された。しかし菴羅が阿波可汗を統御できずに可汗位を退いたため、摂図が推戴されて六代目大可汗となった。『隋書』卷八四突厥伝、系図を参照。

(9) 長孫晟は「達頭可汗は、沙鉢略可汗よりも強大な兵力を有するが、地位が低いため不満を抱いている。それゆえ達頭可汗を扇動すれば、沙鉢略に戦いを仕掛けるだろう」と分析する。『隋書』長孫晟伝、『資治通鑑』卷一七五、大建十三年（五八一）開皇元）条。

(10) 長孫晟によれば、阿波可汗は日和見主義者であるが、沙鉢略可汗を恐れるあまり、その支配を受けているに過ぎない、という。『隋書』長孫晟伝、『資治通鑑』卷一七五。

(11) 長孫晟は「処羅侯は姦計の多い悪賢い人物だが、沙鉢略可汗よりも勢力が弱く、可汗に対抗するため人心を掌握し国人から愛されている。このため処羅侯は可汗から疎まれており、心を安んじる事ができず、可汗の前では取り繕う、可汗への疑念と恐怖を抱いている」と分析する。『隋書』長孫晟伝、『資治通鑑』卷一七五。

(12) 沙鉢略可汗の地所は『隋書』突厥伝に「都斤山（ウチケケン山）」とある。阿波可汗の所領は『資治通鑑』卷一七五によれば「北牙」で、沙鉢略の地所ウチケケン山の北にあった。また『資治通鑑』卷一七五によれば、処羅侯は東方の諸族（奚、靺、契丹等）を統べていた。可汗らの勢力圏については、前掲註（7）護雅夫「一九六七」参照。

(13) 註（3）参照。

(14) 『資治通鑑』卷一七五、大建十三年（五八一）開皇元）条に「遣太僕元暉出伊吾道、詣達頭、賜以狼頭纛。達頭使來、引居沙鉢略使上。」とある。『隋書』長孫晟伝。

(15) 『資治通鑑』卷一七五、大建十三年条に「以（長孫）晟為車騎將軍、出黃龍道、齎幣賜奚、靺、契丹、遣為鄉導、得至処羅侯所、深布心腹、誘之内附。」とある。

(16) 前掲註（7）護雅夫「一九六七」二六七〜二六八頁。

(17) 『資治通鑑』卷一七五、大建十四年（五八二）開皇二）条に「五月己未、高寶寧引突厥寇隋平州、突厥悉發五可汗控弦之士四十萬人長城。……沙鉢略更欲南入、達頭不從、引兵而去。長孫晟又說……染干詐告沙鉢略曰、鉄勒等反、欲襲其牙。沙鉢略懼、廻兵出塞」とある。この五可汗を胡三省は、沙鉢略可汗、達頭可汗、阿波可汗、第二可汗、貪汗可汗の五人であると注記しており、本稿もこれに従う。『隋書』長孫晟伝にも同文あり。

(18) 註（17）の『資治通鑑』卷一七五の記述を参照。

(19) 文帝と沙鉢略可汗の舅婚関係、君臣関係は前掲註（1）護雅夫「一九六七」参照。

(20) 文帝による莫何可汗の冊立については前掲註（1）護雅夫「一九六七」を参照。

(21) 染干の冊立については前掲註（1）護雅夫「一九六七」、染干への二人の公主降嫁については拙稿「隋代の和蕃公主と北方・西方に対する隋の外交戦略」（『立命館東洋史學』第三八号、二〇一五年八月）などを参照。

(22) 西突厥の泥掘処羅可汗は、処羅可汗とも表記されるが、東突厥の処羅可汗と区別するため、本稿では泥掘処羅可汗と記す。泥掘処羅可汗の出自に関しては、大澤孝「新疆イリ河流域のソグド語銘文石人について―突厥初世の王統に関する一資料」（『国立民族学博物館研究報告』別冊二〇、一九九九年）を参照。

(23) なお、このとき煬帝は四度目の高句麗遠征を考えていたが、樊子蓋、蕭瑀、虞世基が煬帝に対し、「征遼・遼東之役（第四次高句麗遠征）をやめると宣言すれば、將兵は、雁門を包圍している突厥軍との戦いに奮闘するでしょう」と進言したため、煬帝も四度目の高句麗遠征を断念した。『資治通鑑』卷一八二、大業十一年条。

(24) 前掲註（21）拙稿「二〇一五」五八頁も参照。

(25) 護雅夫「突厥第一帝国における『S』号の研究」（『古代トルコ民族史研究』I）三六六頁。

(26) 『旧唐書』卷七五韋雲起伝に「契丹入抄营州、詔（韋）雲起護突厥兵往討契丹部落。啓民可汗發騎二万、受其处分……契丹本事突厥、

情無猜忌、雲起既入其界、使突厥詐云向柳城郡、欲共高麗交易、勿言宮中有隋使、敢漏泄者斬之。契丹不備。去賊宮百里、詐引南度、夜復退還、去宮五十里、結陣而宿、契丹弗之知也。既明俱發、馳騎襲之、盡獲其男女四万口、女子及畜產以半賜突厥、餘將入朝、男子皆殺之。煬帝大喜」とある。『資治通鑑』卷一八〇、大業元年条に同文があり、契丹討伐が大業元年（六〇五）である事がわかる。

(27) 吐谷渾史全般については周俛洲『吐谷渾史』（寧夏人民出版社、一九八五年）、吐谷渾と南朝との通好については和田博徳「吐谷渾と南北両朝との関係について」（『史学』第二五卷第二号、一九五一年）、吐谷渾と東魏の連繫については拙稿「西魏・北周の対外政策と中国再統一へのプロセス―東部ユーラシア分裂時代末期の外交関係」（『史窓』第七〇号、二〇一三年二月）、『隋書』吐谷渾伝については小谷仲男、菅沼愛語「『隋書』西域伝、『周書』異域伝（下）の訳注」（『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要・史学編』第十一号、二〇一二年）等を参照。

(28) 『隋書』卷八三吐谷渾伝に「煬帝即位、伏允遣其子順来朝。時鉄勒犯塞、帝遣將軍馮孝慈出敦煌以禦之、孝慈戰不利。鉄勒遣使謝罪、請降、帝遣黃門侍郎裴矩慰撫之、諷令擊吐谷渾以自効。鉄勒許諾、即勒兵襲吐谷渾、大敗之。」「資治通鑑』卷一八〇、大業三年条に「鉄勒寇邊、帝遣將軍馮孝慈出敦煌擊之、不利。鉄勒尋遣使謝罪、請降。帝使裴矩慰撫之。」「資治通鑑』卷一八一、大業四年条に「秋七月……裴矩説鉄勒、使擊吐谷渾、大破之。」とある。前掲註

(29) 『隋書』長孫晟伝に「大業三年、煬帝幸榆林、欲出塞外陳兵耀武、經突厥中指于涿郡。仍恐染干驚懼、先遣晟往諭旨、称述帝意。染干聽之、因召所部諸國、奚、霫、室韋等種落數十酋長咸萃。晟以牙中草穢、欲令染干親自除之、示諸部落以明威重……（染干）遂拔所佩刀親自芟草、其貴人及諸部爭放効之。乃發榆林北境、至于其牙、又東達于薊、長三千里、廣百步、拳国就役而開御道。帝聞晟策、乃益嘉焉。」とある。『資治通鑑』卷一八〇、大業三年六月条も参照。

(30) 『隋書』突厥伝に「先是高麗私通使啓民所、啓民推誠奉国、不敢

隱境外之交。是日、將高麗使人見、勅令牛弘宣旨謂之曰、朕以啓民誠心奉国、故親至其所。明年當往涿郡。爾還日、語高麗王知、宜早来朝、勿自疑懼。存育之礼、當同於啓民。如或不朝、必将啓民巡行彼土。使人甚懼。」とある。『隋書』卷六七裴矩伝、『資治通鑑』卷一八一、大業六年条も参照。なお、突厥と高句麗の連繫が煬帝の危機感を喚起し、高句麗遠征に繋がったとの見方もある。金子修一『隋唐の国際秩序と東アジア』（名著刊行会、二〇〇一年）四五頁、田中俊明「朝鮮からみた遣隋使」（『遣隋使がみた風景』）等を参照。

(31) 『隋書』西突厥伝に「煬帝遣司朝謁者崔君肅齋書慰諭之。処羅甚踞、受詔不肯起。君肅謂処羅曰……今啓民……卑事天子以借漢兵、練二大國、欲滅可汗……可汗若稱藩拜詔、国乃永安……不然者……發大隋之兵、資北蕃之衆、左提右挈、以擊可汗、死亡則無日矣……処羅聞之、巽然而起、流涕再拜、跪受詔書。」とある。『隋書』卷三煬帝紀、『資治通鑑』卷一八一、大業四年条によれば、崔毅（崔君肅）が泥撒処羅可汗のもとに派遣されたのは大業四年。なお崔君肅は、泥撒処羅可汗の母向夫人の生命も威嚇の材料にして可汗に跪くよう促している。

(32) 護雅夫氏は、狼頭麤を可汗のシンボルであると解釈している。前掲註（7）護雅夫「一九六七」二八〇頁の註九。なお、隋末の乱の時、東突厥の処羅可汗は、劉武周や梁師都に対し可汗号とともに狼頭麤も授けている。『旧唐書』卷五五劉武周伝、卷五六梁師都伝。

(33) 註（9）参照。

(34) 『隋書』西突厥伝に「帝於仁風殿召其使者、言処羅不順之意、称射置有好奇、吾將立為大可汗、令發兵誅処羅、然後當為婚也。帝取桃竹白羽箭一枝以賜射置、因謂之曰、此事宜速、使疾如箭也……射置聞而大喜、興兵襲処羅、処羅大敗。」とある。

(35) 前掲註（1）護雅夫「一九七六」一四二頁、前掲註（2）内藤みどり「一九八八」等を参照。

(36) 前掲註（2）内藤みどり「一九八八」一一九〜一二〇頁。

(37) 『資治通鑑』卷一七六、禎明元年（五八七）開皇七）四月条に「隋使車騎將軍長孫晟持節拜之、賜以鼓吹幡旗。莫何勇而有謀、以

隋所賜旗鼓西擊阿波。阿波之衆以為得隋兵助之、多望風降附。遂生擒阿波」とある。『隋書』長孫晟伝、突厥伝も参照。

(38) 和蕃公主については、藤野月子『王昭君から文成公主へ―中国古代の国際結婚』（九州大学出版会、二〇一二年三月）、拙稿「和蕃公主を通じての唐の外交戦略」（『総合女性史研究』第三二号、二〇一四年三月）等を参照。

(39) 前掲註(21) 拙稿「二〇一五」。

(40) 前掲註(27) 和田博徳「一九五二」、坂元義種『倭の五王―空白の五世紀』（教育社、一九八一年）、榎本あゆち「南斉の柔然遣使・王洪範について」（『名古屋大学東洋史研究報告』第三五巻、二〇一一年）等を参照。

(41) 西魏、及び北周の周辺諸国及び対外勢力（柔然、吐谷渾、突厥）との連繋や外交戦略については、前掲註(27) 拙稿「二〇一三」を参照。

(42) 菅沼愛語、菅沼秀夫「七世紀後半の「唐・吐蕃戦争」と東部ユーラシア諸国の自立への動き」（『史窓』第六六号、二〇〇九年二月）、拙稿「八世紀前半の唐・突厥・吐蕃を中心とする国際情勢」（『史窓』第六七号、二〇一〇年二月）、拙稿「徳宗時代の三つの唐・吐蕃会盟」（『史窓』第六八号、二〇一一年二月）、拙著『7世紀後半から8世紀の東部ユーラシアの国際情勢とその推移―唐・吐蕃・突厥の外交関係を中心に』（溪水社、二〇一三年十二月）、拙稿「九世紀前半の東部ユーラシア情勢と唐の内治のための外交」（『史窓』第七三号、二〇一六年二月）。